
ENTER THE BOX

脱脂綿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ENTER THE BOX

【Nコード】

N5493S

【作者名】

脱脂綿

【あらすじ】

見えない壁で閉じ込められてしまった女の子の話

ENTER THE BOX 1（前書き）

ファンタジー・・・というか非現実的なことが書いてあります。
描写も割と抽象的なところがあるかもしれませんが（笑）
雰囲気重視して書いてるつもりです^^；

ENTER THE BOX 1

——私は、箱に閉じ込められている。

ベッドの上。

お母さんの、起きなさい、今日は部活でしょ、という声が聞こえる。私はその声を無視して高校の制服に着替え、家を出て、入り組んだ箱の中を歩いて行く。

箱の中は、たくさんの家や人や木々や、コンクリートで塗り固められた建物や、雲を捕らえようとしているかのような電線やらでごちゃごちゃしている。

そして、私はその中をゆっくりとした足取りで進んでいく。

私はこのとてつもなく大きな箱の中にいた。

四角く切り取られてしまった、生まれ育った見慣れたまち。

私はその外に出ることができない。

箱の中を動き回れる時間は、限られていた。

それは、約10時間。

タイムリミットが来ると、時間も場所も一瞬でリセットされて、またお母さんが私を起こす。

最初は、いや、あの日までは。

ここは箱などではなく、世界だった。

見えない壁に切り取られることもなく、ずっとずっと、果てしなく広がっていた。

家の中の日捲りカレンダーはその厚みをきちんと減らしていたし、まちを歩く人も知らない人ばかりだった。

けれど今は。この箱から出られなくなってしまった今は。

スタート地点に戻って、10時間が経って、

でも一日の始まりにお母さんがめくるカレンダーはいつも、3月31日。

つまり、この箱の中はいつも4月1日で。

この状況がエイプリルフールの一環だったらいいのと思わなくなつたのは、ずっと前だ。

まちを歩く人は毎回同じで、何十回とこの日を繰り返すうちに顔ぶれも覚えてしまった。

私は、初めてのこの日のことを思い出してみる。

時間の経過で考えると初めてのこの日から2ヶ月は経っているはずなのに、嫌なほど鮮明に思い出すことができた。

その日、最初の4月1日は、部活だった。

慣れ親しんだ友達や後輩と、いつもと同じように活動して。

私は夕方ごろ、学校から帰るために、通い慣れた道を1人で歩いていった。

そこで、後ろに男の人がいることに気がついた。

はじめはあまり気にしていなかった。

私は時計を見て、見たいテレビがあるのを思い出して、すこし早歩きになった。

そうしたら、男の人も早歩きでついてきた。

そこで一気に怖くなつて一生懸命走ったけれど、そこまで体力のなかった私はすぐに追いつかれてしまった。

奇妙なほど鮮明な記憶の中で、その人の顔だけはどれだけ思い出そうとしても全く思いだせない。

もしかしたら頭のどこかで無意識のうちに、忘れたいと思っているのかも知れなかった。

その男の人は、私をどこかに連れて行こうとしたのか、腕をものすごい力で引っ張った。

私は抵抗して、力いっぱい叫んだ。

すると男の人は懷からナイフを取り出して、何の躊躇いもなく、私のおなかに突き刺した。

おなかから広がる、死の感覚。

覚えているのはそこまでだ。

でも、どれだけ頑張っても。

家の中にずっと籠っていて、あの道からどれだけ離れても。

同じ時間に、私はあの人におなかを刺されて死んでしまう。

そのたびに、死の感覚が押し寄せてくるのだ。

そして次の瞬間には、また家のベッドに戻っている。

あの日と違う行動ができるのは、私とあの男の人だけのようだった。お母さんはいもしない私に向かって話しかけて、いもしない私を送り出す。

それを見ている人も何も不審がらず、そして、私がどれだけ大声を出して話しかけても誰も気づかなかった。

はじめのうちは怖かった。

周りの人が、自分に反応を示さないことも。

最後には必ず死んでしまうことも。

人間は慣れの動物だと言われている。

そのおかげか、私はもう、死ぬということに恐怖を感じない。

それは良いことなのかもしれないし、悪いことなのかもしれない。ただ、それも慣性に流されてどうでもいい事柄になった。

現場を中心としたい？ 四方に広がる箱の西側に位置する路地裏。

ここは、誰もいないスポットの1つだった。

何回かやりなおして、ようやく見つけた場所だ。
ここには誰も来ない。

1人になりたいとき（すでに1人のようなものだったけれど）ここに来て、ボーっとしていることが多かった。
でも今回はなぜか、

「思ったより、範囲が広いな・・・」

『・・・まあ、気長にいきましょう』

聴き慣れない音。

少し気だるげな男の人の声と、受話器越しに聞こえる少年の声のよ
うな音と、靴がアスファルトを擦る音がする。

結局のところ、私はまだ、諦めきれていなかったのかもしれない。
私は、少しの期待と驚きで、その音に向かって歩いていった。

そこには、何やらごちゃごちゃした服を着た青年がいた。

壁の陰に身を潜めて、観察する。

青年は眼鏡を片手でつまんで目の前に掲げているという、なんとも
不思議なボージングだ。

その眼鏡には、左のこめかみあたりのちょうど折れ曲がっている部
分に小型の機械が付いている。

「あんなたくさん人がいるのに、どう探すんだ」

眼鏡に話しかけている（ように見える）。

すると、眼鏡が答えた（みたいだ）。

『ほとんどの人はこちらに何も反応しません。それはただループし
ているだけの人です。こちらに反応を示す人が』

「ピンゴってわけ、か」

ループ・・・

もしかしたら、この人（たち？）は、何か知っているのかもしれない。
い。

「・・・・・・？」

と、向こうが自分（たち？）を見ている私に気がついた。

数秒、ただじっと見つめあう。

私は内心びくびくしながら、声をかけた。

「――・・・あ、あの・・・」

向こうもかなり驚いたようだった。

口をぽかーんとあけて、眼鏡を落としそうになって慌てて持ち直して、周囲に自分たちしかいないことを確かめた。

「いきなりビンゴ？」

『今回は運が良かったですね』

「やっぱり、眼鏡が喋ってるんだ・・・」

感慨深い。生きてて（もう死んでるのかな？）良かった・・・
うーむ、ハイテク。

『あ、はじめまして。僕は眼鏡を通して通信している、すいう翠雨です。
よろしく願います』

礼儀正しい・・・

眼鏡も捨てたもんじゃないな。

眼鏡っ子万歳。

「・・・かななまこと神風純です、よろしく」

丁寧な翠雨くんに比べて、神風さんは割と面倒そうに言った。

「えっと、たちはなすす立花鈴です。よろしく願います、翠雨くん、神風さん」

自己紹介を済ませると、神風さんはなにやら身震いして、不快といった目でこちらを見た。

7割の不安と3割の不満。私なんか変なことしたかな？

「・・・敬語とさん付け、やめてくれない？何か変」

そんな、理不尽な。じゃあ神風と呼べばいいの？

『純、でいいのでは？あと、僕のことも翠雨と呼んでいただければ』

「は、はい・・・」

名前呼び捨て・・・！

「まあ、そっちのほうがいいけど」

といった感じで奇妙な自己紹介は終わった。

ENTER THE BOX 1（後書き）

1回の投稿があまり長いのもアレかなーと思ったのですが、そんなことないんでしょうかね？

よくわかりません（´ω｀;）

変なところで区切ってしまいました；

ここまでで1話の3分の1くらいでしょうか

ENTER THE BOX 2（前書き）

区切る場所を失敗した感があります（笑）

ぬるいファンタジックワードがちらほら出てきますので苦手な方はご注意ください。

ぬるい戦闘シーンもあります。苦手な方でもたぶん大丈夫です。ぬるいです。

ENTER THE BOX 2

タイムリミットまであと3時間半。

私はちょうど、今までの経緯をすべて話し終わった。

「……じゃあ、あと3時間くらいで、終わるのか」

「うん」

「……怖くない、のか」

「もう、慣れたよ」

純はうーん、と唸って言葉を切った。

「えーと、純……たちは、どうしてこの箱の中にこれたの？何をしに来たの？」

純は、まずい、という顔をして、眼鏡を見た。

『鈴さんのことばかり聞いて、こちらのことは説明不足でした。すみません。僕たちは、試験の真っ最中なんです』

それでも説明不足だとは思うが。

純は今まで相棒の説明不足を補う役目をずっと担っていたらしく、またか、と言わんばかりに盛大なため息をついて付け足しをした。

「あー……オカルト専門の仕事……の採用試験。普通じゃない事件の解決をして、ポイントを稼いで、一定まで貯まると合格して本格的に働ける」

私はいまいちわからなかったが、とりあえず、純たちは試験を受けていて、合格するためとはいえ、私のことを助けてくれるらしい。

「私、もう殺されなくて済むの？」

なんだか、ずっと忘れていた感情が息を吹き返した気がする。

「……俺の技量が足りるなら」

純は少しやさしい声で言った。

もうすぐ、時間だ。

純と翠雨は、その時間に死ななければループ現象は終わるはずだ、

と言った。

もし、この現象が終わってしまったら。

私の命も、終わってしまうのだろうか。

怖くて、聞くことができなかった。

きつと純もあえて言わないんじゃないかと私は思った。

それに、終われるなら別にいいような気もした。

——あと、1分。

男は、現れた。

10時間に1回は見ているはずなのに、毎回のように忘れて、出会うたびに思い出す、その顔。

私はいつものように身構えて、男と向き合う。

その間に、眼鏡をかけた純が立つ。

「下がってて」

短く言つて、純が地面を蹴った。

——あと、40秒。

男は怯むこともなく、純にナイフを向けた。

（速い、かも）

純はそのまま走り続け、切っ先が届く直前に体勢を低くし男の懐に入り込んで、そのまま右手をねじあげた。

しかし男は無言のまま左手で純の腹を殴り、引きはがす。

（なんだこいつ・・・痛みを感じないのか？）

——あと、20秒。

純は再びもちなおし、今度は男の脛を思いっきり蹴った。

が、それもまた無反応で、足を掴まれ砲丸投げの要領で吹っ飛ばされた。

「あっ！」

そのまま純は地面に倒れた。意識はあるが、当たり所が悪く、動けないようだ。

翠雨が少し離れた地面に落ちている。

私はとっさに走り出した。

——あと、10秒。

男が純に近づいていく。

私は純のところへたどり着き、男のほうを見て言った。

「私を殺したいんでしょ？」

わずかな可能性に、かけてみたくなった。

——あと、5秒。

男はにやりと笑い——

また、死の感覚が押し寄せてきた。

ベッドの上。

お母さんの、起きなさい、今日は部活でしょ、という声が聞こえる。
私はパジャマのまま家を飛び出した。

あの路地裏につくと、最初に会った時よりもボロボロになった青年
が壁にもたれて座っていた。

なんだか疲れているような怒っているような微妙な顔。

こちらに気づいて、パジャマ姿にぽかんと呆れて、しかしすぐにまた不機嫌な顔に戻った。

「よかった・・・大丈夫だったんだ」

なんだか泣きそうになった。

あのとき、とっさに考えたこと。

純は箱の中の人間じゃないから、傷を受けたらループ後も回復しないだろうこと。

もしも、死んでしまったなら、生き返らないだろうこと。

・・・私なら、大丈夫であろうこと。

「・・・ごめん」

純はこちらを見ずに、力なく言った。

たぶん、自分を責めているのだろう。

私を助けられなかったことに対して。

助けられてしまったことに対して。

「すごく、悔しい。いや、そんなことより」

ひどく億劫そうに、首をこちらに向けて。

「だいじょうぶ？」

自分のほうが、全然大丈夫じゃなさそうなのに。

私はもう、傷も痛みも何もないのに。

ぼろぼろの格好で、ぼろぼろの声で。

私を、心配している。

「——うん……っ」

私は、純の体にしがみついた。

この箱の中で、久しぶりに泣いたかもしれない。

私の涙が収まるまで私を抱きしめて無言でいた純は、静かに話した。

「……俺、怖かった。自分が傷つけられるのは平気なのに、お前が刺されたとき、死に直面した、というか、人はあっけなく死んでしまうんだ、って分かったというか……」

突っかかりながら、言葉を選びながら。

「鈴は、慣れた、って言ってたけど、慣れるわけ、ないよな……」

そうだ。私は慣れたわけじゃなかったんだ。

感覚が、麻痺していただけなんだ。

よかった。私はまだ、人間でいられてる。

何分経ったか、2人とも落ち着きを取り戻した。

私は意図せずに抱き合ってしまったことに気がついて、焦ってすぐに離れた。

純はそんなに焦っていなかったけれど。

「次は、絶対に大丈夫だから」

純はそう言っ、私の頭をぽんぽんと叩いた。

うん、と頷いて、何かが足りないような気がして、すぐそれに思い当たる。

「翠雨は・・・？」

「ああ、スイッチ切つてある。いろいろ心配してうるさいから」
翠雨を哀れに思う。

「そろそろ、つけないとな」

純はポケットから眼鏡を取り出して、左側の機械についている3つのボタンの一番下を押した。

しばらく、ガーというような機械的な音が出て、少年の声が姿を現した。

『純！心配しましたよ！・・・つと、鈴さん！大丈夫でしたか？！』
相棒と同じことを言う。

「うん、ありがと」

少しほえましい。

「・・・あいつのこと、解析できたか？」

あいつとはたぶん、私を殺した人のことなのだろう。

翠雨は言葉を羅列した。

『はい。まずはこの世界のことから。この世界は、鈴さんが殺された直後にいきなり朝に戻ります。タイムラグはありません。そのことからやはり鈴さんが殺されてしまった後にはなにもすることができません。鈴さんはいつも同じ時間に殺されると言っていましたね？純がにらんだとおり、鈴さんがその時刻のあと死んでいなければ時間の流れが狂って崩壊し、ループ現象は終わると思います。しかし・・・終わった後の鈴さんの命がどうなるかは、ハッキリ言つてわかりません。生きるかもしれません。死んでしまうかもしれません』

「・・・わかった」

純は私のほうを心配そうにのぞき見た。

「大丈夫だよ」

「ちがう」

すぐに言葉を遮られた。

「・・・えーと・・・死ぬのは怖い。すごく。だけど、この

ままじゃいやだから」

正直に言つと、純は少しだけ、本当に少しだけ笑った。

「・・・まあ、少なくとも停滞はないと思うから」

私は、その答えだけで十分だった。

『そして、男のことについてですが、人間ではありません』

「人間じゃ、ない・・・？」

どこからどう見ても、人間じゃないか。もう顔とか覚えてないけど・

『男は温度を持っていません。何者かはまだ完全には判断できませんが、人間ではないことは明確です。おそらく・・・』

「天界の住人」

『はい』

なんだか2人で会話が成り立っているが・・・まったく付いていていない。

「えー・・・っと、悪魔ってこと？」

「うーん・・・そんな感じ？あいつらは人間を不幸にするのが好きだから」

なんだかよくわからない。

「とりあえず、今日で終わらせる」

純は、決して大きくはない声で、しかしはっきりと言った。
「なんでか、少し安心した。」

ENTER THE BOX 2 (後書き)

ここまで読んで下さった方は本当にありがとうございます^^
ものずk・・・いやなんでもないです。

この次で1話は終わりになると思っています。

かなり前に書き終えていたやつなのでさくさく上げます^^;
おつかれさまでした

ENTER THE BOX 3 (前書き)

前回よりファンタジック(笑)な感じになってます^^;
自分でもちよっと恥ずかしいです(笑)

ENTER THE BOX 3

今日は、箱の中をいろいろ動き回った。

翠雨の願いで箱の端をたどる。

『“見えない壁”はどうですか？硬いですか？痛いですか？』

純は面倒くさそうな顔をして、でも少しやさしい顔をして、頼みをきいてあげている。

「うーん・・・、硬いというか、これ以上はどうやっても進めない。強く叩いても痛くない。腕を伸ばしたいんだけど腕の長さが足りなくてこれ以上伸ばせないような、水が出ているホースの口を塞ごうとしてるような」

『うわーいいなあ！僕も触りたいです・・・！』

そんな微笑ましい2人を黙ってみていた私は、さつき浮かんだ疑問をぶつけてみた。

「2人はどういう関係？」

「・・・別に、ただの相棒」

『ひどいですね・・・実際にはそうなんですが・・・』

翠雨はちよつと心外つぽい。

「まあ、出会いから話すと3時間じゃ足りないから、また今度な」

ほんとかな・・・ただ面倒くさいだけじゃ・・・？

でももしほんとだったら、

「また今度、か・・・」

純がなんともいえない顔をして、こっちを見ていた。

「・・・そんなにニヤニヤして、何考えてるんだ・・・？」

「・・・べ、別に何も・・・」

あと10分。

私たちは入り組んだ狭い路地に移動していた。

「ここのほうが逃げやすい」

「な、なるほど・・・」

意外に頭いい。

「一応言っておくけど、何があっても助けようなんて思っな。自分が逃げることだけ考えろ」

絶対言われると思った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

でも、純を見捨てるなんてできるのかな・・・

「いいな？」

今までで一番真剣な顔。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

「よし」

『では計画を確認しましょう』

あと1分。

ついに、あの男が現れた。

「スタート、だ」

純の合図で私は男と反対側に逃げた。

純がその間に立ちはだかる。

私は頭の上の翠雨に話しかけた。

「ねえ翠雨、大丈夫かな・・・？」

『僕の相棒ですよ？こんなところで負けるようなやつではありませんせん』

翠雨はきっぱり言い切った。

「そっか、そうだよな」

・・・・・・・・・・・・・・・・

でも、やっぱり・・・

突然、私は急停止した。

『・・・・・・・・どうしました？まさか戻ろうなんて・・・』

「考えてるっ」

私は踵を返して再び走り出した。

『鈴さん、落ち着いてください！あと40秒もないんですから！』

最近走るなんてしてないから、すぐに息があがる。でも、でも……

「やっぱりっ……置いてくなんてっ……できないよっ」

戻ると、純が男と戦っているところだった。

明らかに男の優勢。

純と一瞬目が合った。狼狽するかと思っただが、あまりしていない。

私の行動は予測済みだったのか、それとも余裕がないのか。

『……あと15秒です』

翠雨は私を引き止めることができないと判断したのか、素直に諦めたようだ。

純と男は相変わらず戦い続けている。

と、純が体勢を崩した。

「あっ」

私はとつさに口を両手で覆った。

純はその後まなんとか男の攻撃をしのいでいるが、かなり危険な状態だ。

私は意を決して、深く息を吸った。

「……っその男の人！こっち見なさい！！」

男は純を攻撃するのをやめ、こちらを向いた。

純は突然のことに唖然としている。

「あなたの狙いは私でしょ？！そんなヤツ相手にしないで私と遊べ！！」

「『馬鹿！』」

2人の声が同時に聞こえた。

……とりあえず、男は私を標的にしてくれたみたいだ。

「……さて……」

私は誰に言ってもなく、というよりむしろ自分に向かってつぶやいた。

なんとか抑えようとする純を振り切って男がスタートしたことを認

識した瞬間、

「にげるっ!!」

私はまた同じ道を走りだした。

ちよつと後ろを振り返ると、予想よりも1まわり拡大されている男が目に入った。

た・・・たつた今、もう振り返らないと決めた。

「あと何秒?!」

『あ、あと6秒です』

い、いけるかな・・・。

でも、もう純がボロボロになつてしまうのは、嫌だ。

後ろの気配が近づいてくるを感じる。

やばいと思つた瞬間には肩を押され、いとも簡単に倒されてしまった。

男がナイフを振り上げて――

男はそのまま黒い煙となつて消えた。

「・・・・・・・・?」

『・・・・あと1秒で、また死んでましたよ』

翠雨が心底疲れた声で言つた。

そっか、

「間に合つたんだ・・・」

起き上がつて、でも腰が抜けていることに気がついて、地面にへたり込んだままの体勢でとりあえず息をついた。

そして、

「なんか・・・地面ちよつと揺れてる?」

『え?ここで地震は起きていないようですが・・・・』

周りを見渡すと、その原因がわかつた。

純がすごい勢いで走つてきている。

やばい、怒られる・・・

とにかく衝撃や大声に備えて目をつぶった。

——しばらく待っても、なにも起きない。

「・・・・・・・・？」

恐る恐る目を開けると、すぐ隣に純がしゃがみ込んでいた。
ため息が聞こえる。

「えっと・・・・・・・・大丈夫？」

「・・・・・・・・ほんと焦った・・・・・・・・」

純が翠雨と同じような声で言った。

なにはともあれ、箱は消滅したようだった。

私の知らない時間が流れ始めた。

私は死なずに済んだようだ。

当たり前のことだが、あのあと私は純と翠雨にこっぴどく叱られた。

「お疲れのところちよいと失礼」

ちようどお叱りが収束したところで、聞いたことのない声が降ってきた。

そう、まさに降ってきた。

空から人がゆっくり下りてきているのだ。

「トップの方が何か用ですか」

純が突き放したように言う。知り合いっぽいけど・・・

その人はようやく地面に降り立ち、私のほうを向いて笑顔で言った。

「はじめまして、お嬢さん。私は神サマです」

「・・・・・・・・はじめまして」

明らかに胡散臭い。見た目チャラ男だし、赤いジャージ着てるし、何か威厳みたいのも全然ない。

「——疑っていますね・・・・。さみしいです」

自称神様はしゅんとした。

『あたりまえでしょう。どうして正装でないのですか』
翠雨もこころなしウザそうだ。

「あんな白い布のどこがいいのですか！着るの大変だし、動きづら
いし、汚れ目立つし……。なにより慌ててきたのです」

そこで自称神様ははっとした。

「そうですね。私はここら辺一帯にできたバグを見に来たの
です。何か天上界^{うえ}からもノイズがひどくて見れないし……。何
があつたのです？」

ここで純が口を開いた。

「Bらしきものが発生し、ループ現象が起きていました。この少女
が巻き込まれていて……。」

「……。そうですか。お嬢さんには迷惑をおかけし
ましたね。私の管理ミスです」

神様は深く頭を下げた。

Bだとかよくわからないけど、そこらへんはきつと業界用語なのだ
ろう。黙っておこう。

「いえ、解決してよかったです」

「それで、ポイントは？」

純がすぐさま口を挟んできた。

あ、もしかして試験がどうか言ってたやつ？

「うーん……。規模も大きかったし、大変だったでしょう。とい
うことで、100ポイント差し上げますよ」

『本当ですか！すごい高得点ですね』

「あと、420点だな」

私はその光景を少し遠くで眺めていた。

ひととおり神様（？）との話は終わったらしく、登場したときの一
連の流れを巻き戻したみたいに空に帰っていった。

ああ、当たり前のことだけれど、これで私たちはお別れだ。

これまで過ごした1日分にも満たない時間は“特別”だったのだ。

「……。鈴、」

「あ、助けてくれて、ありがとう。そういえば言っていなかったね。・

・ちょっとの間だったけど、すごい楽しかった。試験、頑張ってるね」

純はまた少しだけ笑って、どうも、と言った。

『僕もきちんとした人と一緒にいられて楽しかったです』

そのあと純のじっとした視線が向けられたのは言うまでもない。

そんなわけで、私は2人と別れた。

2人はどこに向かうんだろう。

とりあえず、彼らの旅路が安全であることを祈っておこう。

ENTER THE BOX 3 (後書き)

というわけでとりあえず1話が終わりました!ばちばち!

ここまで読んでくださった方、おつかれさまです^^

なんだかお気に入り?に入れてくださった方がいらっしやるようで・
・・?

なんかよくわからないのですが・・・
ありがとうございます(´、*)ノ

あんまり内容に触れるのは恥ずかしいので控えますが(笑)、
なぜ「ENTER」THE BOXなのか・・・
一番最初は、

「大きい箱の中に街があつて、同じ時間をくりかえしている」
という漠然としたイメージだけでした。

それにつきます。↑

なんか新しいのを考えるのも面倒だったのでそのままにしちゃいました。

『元勇者』もそうですが、タイトルのネーミングはかなり安直です。
考えるの恥ずかしいです。

あつもしよろしければ感想などいただけたら嬉しいです(´、ω・
()

全力でからみます!(?)

第2話については詰んでる状態です(笑)

いきあたりばったりなので・・・

かなりストックがあるので他の話を投稿しちゃう可能性が高いです
^^;

今度はギャグっぽい投稿できたらいいなーと思いますけど・・・
それかBLですかね・・・(笑)

この話を読んでちょっと脱脂綿に興味をもってくださった方で、
B
「苦手ー」という方は申し訳ないです；

なるべくジャンル偏らないように頑張るつもりです（・ω・）

最後に、

読んでくださった方、本当にありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5493s/>

ENTER THE BOX

2011年10月8日23時58分発行